

2009 年度自己点検・評価報告書

〔文学部〕

学生の受け入れ

目標： 入試制度、および志願者・入学者の状況や動向を総合的に分析し、志願者の現状維持および増加を目指すとともに、本学部の教育目標にかなった学生の受け入れを目指す。

(学生募集方法、入学選抜方法)

A 群：大学・学部等の学生募集の方法、入学者選抜方法、殊に複数の入学選抜方法を採用している場合には、その各々の選抜方法の位置づけ等の適切性

文学部の入学者選抜方法は、主なものとして公募推薦入試、系列校推薦入試、大学入試センター試験利用入試、一般入試があり、この他に外国人留学生入試、帰国学生入試、スポーツ推薦入試がある。次表は 2009 年度の選抜方法別の入学者数とその割合である。これらの入学選抜のうち、学力に力点を置いた選抜を行なっているのは大学入試センター試験利用入試と一般入試である。表では大学入試センター試験利用入試を一般入試に含めて集計しているが、入学者の 50%がこの選抜方法によっている。学力のみではなく、学部の理念や目標の理解や、高校時代の生徒会活動やボランティア活動などを評価することにより、将来社会貢献をなす人格的資質を選抜に生かしているのは公募推薦入試である。入学者の 20%がこの選抜方式によっている。高校とのさまざまな交流のなかで学部の特徴を理解し、強い勉学意欲をもった学生が入学するのが創価学園からの推薦入試であり、入学者の 26%がこの方法によっている。その他は 13 名と人数は多くはないが、外国人留学生入試、帰国学生入試による入学者である。これらのさまざまな入学者選抜方式により、多様な学生が入学し、文学部の多様性を形成している。

	一般入試	創価学園 推薦入試	公募推薦 入試	スポーツ 推薦入試	その他	計
入学者数	213	110	86	4	13	426
比 率	50.0%	25.8%	20.2%	0.9%	3.1%	100%

また、3 年次への編入試験として創価女子短期大学推薦編入学試験が行われている。全学的に実施されている一般編入学試験および社会人編入学試験は、2007 年度以降在籍学生調整のため、文学部は実施していない。

(入学者受け入れ方針等)

A 群：入学者受け入れ方針と大学・学部等の理念・目的・教育目標との関係

文学部は、2007年の改組に際して、文学部の基本コンセプトを「創造的人間主義」とし、「一、生命の尊厳の探究者たれ！ 一、人類を結ぶ世界市民たれ！ 一、人間主義の勝利の指導者たれ！」の3指針のもと、学問共同体として、学生と教員が互いに触発しあい、より深い思索、より価値ある実践へと結実していく、そうした価値創造の学問の伝統を築いていきたい、という文学部のあるべき姿を設定した。これは、他者への深い共感能力に基づく人間理解、生命を尊厳とする人間文化、そして現実への鋭い問題意識をもち世界の平和を志向する人間像の育成を含意している。この学部の方針に賛同し、論理的思考力・語学力・コミュニケーション能力に優れ、人間への幅広く深い関心を持った意欲的な学生を、積極的に受け入れている。

こうした考え方に従い、なるべく多様な学生を受け入れるとともに、多様性を生かせるカリキュラムや学生の個性を重視した指導に留意し、そうした教育ができる在籍学生数の適切な管理を行えるように、学生受け入れを行っていく。

B群：入学者受け入れ方針と入学選抜方法、カリキュラムとの関係

文学部としては、多様な学生の入学を可能とするためには、現行のような複数の入学選抜方法は適していると考えている。多様な入学選抜制度により、高校時代の大学教育への準備状況が様々である学生が入学するため、1年次はあらゆる学問の基礎といえる「人間学・人間教育」を深く幅広く学びながら、専門的に何を学びたいのか、将来何をを目指すのかをじっくり思索するための時期とし、専門コースである「専修」の選択は2年次からとするカリキュラムとしている。

1年次には、前期の必修科目として「基礎ゼミ」と「人間学への招待」を開講している。「基礎ゼミ」は、1クラス18人程度の学生数で開講され、大学での学問の基本的能力である、読む・書く・調べる・発表する力を養成する。また、基礎ゼミ担当教員はアドバイザーとして、新入生の学習指導にもあたっている。「人間学への招待」はオムニバス形式で行う講義で、文学部の基本理念や考え方を学ぶものとなっている。その他に、文学部の教育理念に基づく科目として「講座人間学」を複数開講している。

また1年次では、より具体的に文学部の専門領域に触れることのできる科目を開講している。専修入門科目として、「英米文学入門」や「大学英語入門」、「現代の社会」「国際関係論入門」「メディアと文化」「文化と宗教」「東洋思想史入門」「文化史入門」「日本語学入門」「日本語教育入門」「日本古典文学入門」「日本近代文学入門」「中国語学入門」「中国現代文学入門」「現代中国入門」「ロシア事情」「ロシアの文学」「ロシアの芸術」を開講している。また、学部独自の外国語科目として「英語」「中国語」「ロシア語」「ドイツ語」「スペイン語」などに関する科目を開講している。

こうした1年次の科目を学んだうえで、2年次から専門コースである専修を選択し、専門科目を学ぶことにしている。

(入学者選抜の仕組み)

B群：入学選抜試験実施体制の適切性

B群：入学者選抜基準の透明性

入学選抜試験は基本的に全学的な体制を整えている。ここでは、学部としての特徴を反

映できる公募推薦入試についてみていきたい。

公募推薦入試の調査書調査について、選抜基準を設けて実施している。それぞれの選抜方法や学科専攻の趣旨、選抜基準は入試要項に掲載されており、受験生にはその基準が十分に伝わっている。公募推薦における選抜基準は、提出をもとめる調査書、推薦書、出席状況、資格、クラブなどの記載事項から明らかになっている。選抜基準は教授会の議論のうえ、決定されている。学力試験は英語を指定している。英語の作題、採点は全学的な体制で実施される。面接試験では、面接員による評価基準・配点のばらつきがないように、事前に評価基準・配点が十分に検討される。面接には文学部の専任教員が複数である。

これらの点から適切な体制で、十分な透明性が確保されたうえで公募推薦入試が実施されているといえる。

（入学者選抜方法の検証）

B群：各年の入試問題を検証する仕組みの導入状況

基本的には全学的な体制で検証が行われている。学部の特徴が反映できる公募推薦入試においても、学力試験の検討は全学的に検討されている。また、面接試験の問題が文学部の期待する入学者選抜にふさわしいものであったかは、学部の教授会で検討している。

（定員管理）

A群：学生収容定員と在籍学生数、（編）入学定員と入学者数の比率の適切性

A群：定員超過の著しい学部・学科等における定員適正化に向けた努力の状況

2007年度の学部改編まで、文学部は6つの学科・専攻ごとに入学者の選抜を行っていた。学科専攻で選抜方法も多少異なり、それぞれの定員も少数であるため単年度ごとの入学定員管理がきわめて難しい面がある。さらに、編入学者数、留学者数の増加などが結果として収容定員の超過を呼ぶため、いっそう入学者数の管理を難しくさせていた。しかしながら、定員適正化の努力は、学部改編を契機にかなりの成果を生みはじめている。

文学部の学生収容定員は、1,560名である。2008年5月1日現在、在籍学生数は1,911名で、収容定員充足率は1.23となる。この比率からは、収容定員超過の現状が認められる。これまでの経緯と分析および今後の対策について以下に述べる。

過去3年間の収容定員充足率の変遷は下の表（左）のようになっており、2006年度において約1.30となり、大幅な定員超過であったことがわかる。以後、入学者数の適正化などを行い、収容定員充足率は次第に低下している。

収容定員の超過となった理由のひとつは、まず、入学者が多かったことがあげられる。右の表は、過去3年間における文学部の入学者数、および入学定員数（390名）に占める入学者数の比率を示したものである。

収容定員充足率の推移

	2006年度	2007年度	2008年度
収容定員	1560	1560	1560
在籍学生	2007	1953	1911
充足率	1.29	1.25	1.23

入学定員充足率の推移

	2006年度	2007年度	2008年度
入学定員	390	390	390
在籍学生	412	431	431
充足率	1.06	1.11	1.11

学部改編により1学科体制となったため、2007年度以降は入学者数の管理は従来に比べ容易となった。このため、入学定員数に占める入学者数の比率は、2007年度1.11、2008年度1.11と、従来に比べて改善が進んでいる。

収容定員超過の理由の二つ目は、編入学者が多くなったことであった。2006年度における編入学者は26人であり、ほかに2年次での転籍や転学部などによる学生数の増加もあり、こうした学年進行中の学生数の変動に対する対応が不十分な面があったといわざるを得なかった。このため、3年次への一般編入学試験と社会人編入学試験を一時的に中止した。2009年度の3年次の編入学は創価女子短期大学からの推薦編入学の15名のみとなり、学年進行中の学生数増加を少なくしている。

収容定員超過の理由のその3は、留学による過年度生が多いことである。英文学科の学生の相当数、外国語学科の学生のほとんどが在学中に留学を経験しており、留学する学生は本学の他学部比べてきわめて多い。1年間の留学期間を在学期間に算入して、1年間の留学をしても4年間で卒業できる留学制度があり、この制度を利用できる学生も少なくないが、卒業論文の作成など、実質的に3年間で卒業に必要な単位を修得することが困難であるために、4年次の在籍学生が多くなっている。これらの留学による過年度生対策としては、留学した学生に対して4年間で卒業できるように留学前・留学後の学修指導をより積極的に行っている。

こうした収容定員超過要因の分析と対応により、収容定員充足率は徐々に改善を見せている。学部改編後の入学学生は3年次までであり、4年次以降は旧学科・専攻別の入学学生である。学科・専攻別選抜で入学した学生は減少するため、改編の効果は今後も続き、収容定員充足率は減少すると思われる。さらに収容定員超過状況の改善への努力を続け、在籍学生数の適正化につとめたい。

B群：定員充足率の確認の上に立った組織改組、定員変更の可能性を検証する仕組みの導入状況

学部改編による学部一本での入学者選抜体制は3年目であり、2010年度に完成年度を迎える。このため、2010年度以降、学部改編の効果を検討する時期を迎える。学部改編の効果の検討のなかでは定員充足率の確認は重要な項目の1つである。その検討のうえに、全学的な取り組みの中で、組織改組や定員変更の可能性を含めて、検討したい。

(編入学者、退学者)

A群：退学者の状況と退学理由の把握状況

文学部の年度別の除籍・退学・転籍者は、次の表にみるように、2006年度が35人、2007

年度が33人、2008年が35人である。これを在籍者のうちで、除籍・退学・転籍者をみると、文学部はほぼ30人前後で率にして0.02%未満である。

学部	異動種類	理由	失籍年度			
			2006	2007	2008	総計
文学部	退学	経済事情	4	1	2	7
		病気療養	1	4	1	6
		進路変更	3	3	5	11
		40単位未満	1	1		2
		卒業見込不可	1	1	2	4
		一身上の都合	4	5	8	17
		死亡	1			1
	退学 集計		15	15	18	48
	転籍	経済事情	3	1	3	7
		病気療養	2	2	3	7
		進路変更	1	2		3
		一身上の都合	1	3	1	5
	転籍 集計		7	8	7	22
	除籍	未履修	3	1	3	7
		学費未納	10	9	7	26
	除籍 集計		13	10	10	33
	文学部 集計		35	33	35	103

(2009年現在)

2007年度の入学生より、全学的にGPAによる学業指導が実施されている。文学部では、この学業指導をアドバイザーが行っている。具体的には、1年次は基礎ゼミの担当者、2年次は専修の担当教員、3・4年次は専門演習の担当教員がアドバイザーである。退学の理由は、こうした学業指導のプロセスで把握できるようになっている。ただし、この制度は現在の3年生から始まっているために、4年生や過年度生については把握の体制が整っているとは言えない。全体的には、経済事情、進路変更、病気療養などやむを得ない事情と思われるものが多い。